

遊びを学びにどうつなげるか？

田口貴春

(岡山D&Lスクール代表)

レディネスとは

-
-

誠信 心理学事典 第17版

1993年1月10日 誠信書房 p462

ここでは学習を始めるにあたって、こういった能力をレディネスとしてつけるかについて話をします。

7歳(小学校入学)までには獲得しておきたい能力

- ①ひらがなは読めてかけること
- ②カタカナは最低でも読めること
- ③短い文を読めること
- ④短い文が書けること
- ⑤家族と会話ができること

- ⑥友達との会話ができること
- ⑦最低でも20まで、できれば50ぐらいまで数えられること。
- ⑧量としては10ぐらいまでの大きさが比べられること
- ⑨数が増えていくことがイメージできること
- ⑩数が減っていくことがイメージできること

小学校に入学すると教科学習が始まるが、入学すると突然学習ができるようになるわけではない

乳児期から幼児期までどのような育ちかたをしてきたかが重要

※しかし、それは早期教育をさすものではない、発達段階を飛び越えたことを教えても効果は薄い

教科学習のレディネス

「文字学習開始のレディネスとしては話し言葉のレベルにおける一定の言語能力がまず要求される。p197」として「つまり発達としては5歳半ごろの言語能力が必要ではなかと考える。p198」

「子どもの文字獲得の前提条件としては、言語の力だけではなく、視覚運動統合能力、空間関係把握・統合能力等も必要になる。p200」

「算数」の教科学習を開始しようとするならば、10以上の数概念が形成されていて、10のまとまりを理解する能力が必要であろう。P202

教科学習のレディネスと就学期の発達課題に関する一考察
丸山 美和子より引用

幼児を育てている社会

- 家庭
- 地域社会
- 保育園
- 幼稚園

パーテンの遊びの分類

①専念していない行動／何もしていない状態
(unoccupied behavior)

②傍観者の行動(onlooker behavior)

③一人遊び(solitary play)

④平行遊び(paralell play)

⑤連合遊び(associative play)

⑥共同あるいは組織化された相補的遊び(cooperative or supplementary play)

『乳幼児期の人間関係の発達』 小林 真 1

富山大学人間発達科学部紀要 第 15 巻第 1 号：157－166（2020）

より引用

ここで大切なことは、子供の能力が上がっていくにつれてあそびも高度化してくるということです。

つまり、子供達の能力によって遊び方も大きな枠の中では決まってきます。

- ①子供のあそびには段階がある
- ②大筋で単純なことから複雑なことの方へと進んでいく
- ③自分の能力に合ったあそびをする事が必要
- ④それが次へのステップの準備をする

それに子ども単独ではこのステップアップはできない
養育者がいて子供に働きかけるから能力が伸びていく

自分と養育者との間だけで成り立っていた関係の中に物が入ってくることによってことばの発達が促される。

たとえば、抱かれている幼児が車を見て指さしを盛んにします。それに答えて養育者が「あれはブッブーだね。」と答えます。こういった経験を沢山重ねることによって言葉が伸びてきます。

他の子供達との関係も出来上がってきてこの2者との関係性
があそびをより高度なそれへと段階げていく

ごっこ遊びはこの時期の子どもの言葉を飛躍的に伸ばすあ
そびです。

たとえば、女の子はお母さん役になりお父さん役の男の子
と日ごろ聞いている言葉をその想定しているシチュエーション
に合った形でお互いに発します。

模倣遊び期やごっこ遊び期は3才頃から盛んに行われるようになるが、これはことばの発達にとって重要なあそびです

ルール遊び期と自律期のあそびは保育園や幼稚園を主に舞台にして展開される。このあそびを十分に行うことによって社会性を身につけていき小学校への就学の準備が行われます。

IV. 数の獲得と文章題

数のもつ2重性

序数性（順番としての数）

順序や順位を表す概念

基数性（量としての数）

数そのものが持つ「量」を表す側面

通常の子どもさんの場合、数を数えられるようになると(序数性の獲得)程なくして量としての数も理解できるようになる(基数性の獲得)ということです。

軽度の発達障がいをおもちのお子さんはかずを数えることはできるが、量としての理解がなかなか進まないことが多く見受けられます

軽度の発達障がい児の場合「序数性の獲得と基数性の獲得」との間に時間的な差が大きく存在していることなのです。ですから、「数は100まで数えられるのに計算がなかなかできるようにならない」というようなことが起こってくるのです。

普段の生活や遊びの中で育つ数量感覚 (原始算数)

①同じものを集める

果物の中からミカンをより出す
同じ色の折り紙を集める
犬と猫を分ける

②大きい、小さい

お兄ちゃんとケーキを分ける
ボール遊び(大きさのまちまちなもの)

③多い、少ない

飴やクッキーを分ける

積み木遊び

シール集め

④増える、減る

お母さんからお菓子をもらう

虫取りで虫を捕まえる、逃げる

友達にお菓子をあげる

生活の中で数的感覚が芽生え経験が豊かになるにつれて感覚が発達する

計算か文章題か

算数教育は

「計算から入るよりは文章題から取り組む方が良い」

『子どもたちが発明する算数—ピアジェの構成論にもとづく教育』
コンスタンス・カミイ/レズリー・ハウズマン 大学教育出版

長年の研究による結論から提唱している

幼児期の発達は普段の生活の中から

幼児達は普段の生活や遊びをいろいろと経験する中で育っていきます。そしてそれは一歩ずつ階段を上ることで達成されます。

軽度の発達障がいをもつ子どもも階段を丁寧に上がっていくことで発達していきます。

子どもには教えるのにちょうど良い時期があります。そこを見極めて教えることが必要

子どものレディネスの状態を無視した指導はむしろ害